

これからの放送教育のあり方

～ デジタル化時代における放送教育のあり方～

平成16年度第56回北海道放送教育研究大会 記念講演資料

2004.11.18. @ホテル札幌サンプラザ



岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授 鈴木克明

ksuzuki@soft.iwate-pu.ac.jp

<http://www.et.soft.iwate-pu.ac.jp/>

1. デジタル化時代：情報教育環境のイメージは？

- 2005年を目標にすべての教室に高速インターネット？
- 総合的な学習の時間から各教科への広がり
- 情報教育カリキュラムと各教科への取り込み
- 情報教育はパソコンなしでもできる：古い情報観から新しい情報観への転換

2. 温故知新：放送教育は40年前からの情報教育だった

- 学校教育改革運動としての放送教育：現在進行形の情報を教室に送り込む
- 規範としての権威 vs なんでも知っていることは不可能な世の中
- 放送教育の普及と改革運動の衰退：使われすぎて駄目になった？
- 制作者集団の存在こそが放送教育の独自性
- 伝統的放送教育と新しい放送教育の2本柱を立てる：全放連のスタンス

3. 授業・教材を魅力あるものにする；ケラーのARCSモデル

- 学習意欲の問題は4つに分類できる：A注意、R関連性、C自信、S満足感
- 授業の魅力：できるようになったけど「もうやりたくない」を回避
- 動機づけデザイン：必要な作戦だけを取り入れる
- 情報活用能力の育成につながる意欲：C - 3コントロールの個人化（子どもに工夫させる）

4. メディアによって教師の役割はどう変わるのか？

- メディアを使うことが目的ではない？
- 子どもの道具として：学習意欲・学習効果・学習効率・制約の緩和
- 学習目的として：インターネットの使い方指南
- 教師の助っ人として：人間教師がなすべきことは何かという問い
- 授業を知る道具として：これまでの授業の良さ・欠点を浮き彫りにする
- じゃがいもアンケート：事前事後の変化で子どもの成長を見とる道具

5. 研究成果をしっかりと残すための提案

- 結果の出せる放送教育研究準備チェックリスト
- 「25年後の学校はどう変わるか」よりも「25年後の学校をどう変えるか」

2、学校教育改革運動としての放送教育

かつて放送教育がその黎明期において伝統的な学校教育にカウンターパンチを与えようとした教育改革運動であったと指摘する関係者は少なくない。放送番組の制作にたずさわった浦（1990）は、番組制作にあたって一番大きな示唆を得た大村はまの実践を日本の伝統に照らせば「例外的存在」であるとしながら、日本の伝統的な教育観に基づく教師像を次のように説明している。

明治以降の伝統的な日本の近代教育では、教師は教室で「送り手（教え手） 受け手（学び手）」になっていなければならないとされた。教室という密室（聖域）の中で、教師はすでに過去形になっている知識内容を完璧に把握していなければならないと、一段高い教壇から「送り手」として「受け手」に垂直に下ろすベクトル（ ）はゆるぎない予定調和であることを理想としたのである。（浦、1990、54頁より引用）

この伝統的な学校教育にカウンターパンチを与える教育改革運動としての問い掛けを込めながら、放送番組は送り出されていた。すなわち、過去形の知識を完璧に把握した教師によって予定調和的に伝達が行われている教育の「聖域」を社会に開き、現在進行形の情報を教室に直接送り込むことで教師を子どもと同じ受け手の位置に立たせ、知らないと赤裸々に言える教師像、知識量の優位性ではなく問題解決能力で子供をリードする教師像を追い求めていた。

当時（今[注：執筆当時の1995]から30年前）の学校放送番組の利用についての指針を提供した文部省の手引き書『学校放送の利用』にも、この改革運動としての放送教育の性格が読み取れる。とりわけ、「学校放送の利用において、教師にどのような役割や心構えが望まれるか」という質問について、次の趣旨の回答が載せられているのが興味深い。当時の学校放送の導入が意味した事態が今日のコンピュータ導入に通じる部分が多くあることが、この回答の「放送」という文字を「コンピュータ」や「マルチメディア」、あるいは「インターネット」に置き換えて読むとよくわかる。

- （1）学校放送は、これまでの教材に比べて異なった特質をもち、従来の考え方のままでは気安く利用できない。これは、単なる技術的な問題でなくて、指導や教材に対する教師の基本的な考え方に連なる問題である。
- （2）放送は（地図や模型などの教材と違って）作用的機能をもち、教室の中にもうひとりの教師が現われたかのような観を呈する。この機能を過信すると、放送によって学習している間は教室の教師の役割がなくなるのではないかと考えられないこともないが、教師の存在は依然としてきわめて重要である。教師が学校放送の価値と効果に自信をもって児童生徒と一緒に視聴する場合には、放送が教師の指導の一部ないしは延長として受け取られるようになる。学校放送の利用には、こうした新しい教師の役割が求められる。
- （3）放送には、教科や主題によっては教師も放送によって初めて知るようなものが出たり、出演する教師や専門家の指導も優れているのが普通である。一方で、内容を前もって十分研究することが難しいという制約がある。
- （4）教師は教える事からはじゅうぶんに究明しているべきで、かりそめにもわからないことやあいまいなことが残されてはならないというのが一般の通念である。また、その指導も児童生徒の模範としての權威を備えなければならないと考えられている。（中略）この点については、教師のあり方や指導についてのこれまでの通念を再検討することが必要ではないだろうか。教師ができるだけ多くの事らをより深く体得していることはもちろん大事であるが、現代のように著しい速度で進展していく時代にあっては、教師は何でも知っているものとしてふるまうことはほとんど不可能である。教師にとって大事なことは、知らないことを恐れることではなくて、より多く知ろうと努力することである。（文部省、1968、87頁より引用）

参考文献

浦達也（1990）「放送教育を再活性化するコミュニケーションの場」『放送教育』1990年9月号 52-55
文部省（1968）『学校放送の利用（第9版）』 日本放送教育協会

出典：鈴木克明（1995）「学校教育改革運動としてのメディア教育 放送教育とコンピュータ教育を例に 」 日本教育方法学会（編）『教育方法研究24 戦後教育方法研究を問い直す 日本教育方法学会30年の成果と課題』明治図書、201-209

3、放送教育の普及と改革運動の衰退

放送教育が時代の花形になり、他に類を見ない高利用率を達成するに至り、改革運動としての勢いは失速する。放送番組の利用者の多くは、変革を望んではいなかったからである。児玉（1990）は、昭和三十年代の「学年別編成」を放送教育の大転換と位置づけ、法的拘束性が打ち出された学習指導要領の公布との関係を認めつつも、学校現場への適合がその背景にあると指摘する。『放送教育五十年』によれば、科学番組も「豊かな科学的教養を高校生に」という理想が、高校受験体制、学力向上というスローガンのもとに消えていくことになり、『科学の目』という番組がより教室カリキュラムの濃くなった理科教室の拡充時間帯に吸収されていったことが報告されている。当時ディレクターであった児玉（1989）は、次のように述懐する。「社会科番組でもやはりある情報、認知の領域的なものを半分ぐらいは伝えるという要素をどうしてもいれなければならない。で、残り十分で問題点を提起するという、二元論でやってきました。だから番組としては盛り上がりがないんですが、現場の要求に従うためには、そうせざるを得ませんでした。（17頁）」

放送される番組自体が学校教育に変革を迫るメッセージを秘めることをやめてしまえば、教育改革運動としての役割を果たすことはできない。一方で、メッセージが込められたものは現場から「使いづらい番組」と評されて利用してもらえない。あまりに多くの利用者を得たがために、変革を望まない多数派の要望に従った番組を流すことになっていったのである。

水越（1990）は、放送利用は従来の教師 教科書中心の一斉授業に横穴を開け、その根底をゆるがすような一大変化を迫ったが、その結果として「教室の文化変容」は起きなかったと断定する。教師中心の従来の教育方法が温存された理由について、次の点を指摘している。

- （1）設計段階で放送番組数本を教科書中心の単元の中に位置付けることで、テレビの内容と教科書の内容をこれまでの視聴覚教材と同じ方法で融合したこと。
- （2）実施段階で視聴後の発展学習に重点を置くことで、授業展開における教師の主導権を温存し、これまでの指導方略を使い続けたこと。
- （3）VTRの普及で番組の取捨選択や分断利用・部分利用が可能になり、番組の殺生権を完全に握ったこと。一般番組の利用や、古い学校放送番組の再利用までも可能にしたこと。

低利用率やメディアとしての相対的重要性の低下を受け、放送教育研究者の間では、今こそ放送教育を見直し、低迷を改革運動再開への契機とするべきであるとの論が提起されている。児玉（1990）は、「視聴覚教材として圧倒的なシェアをもっていた状況の中では、『最大多数の最大幸福』を考えざるをえなかった。しかし、現在は幸か不幸か『ワンノブゼム』になってしまった。もう現場適合の論理から訣別してもよいではないか（35頁）」と主張する。当時NHK学校教育部長であった八重樫（1989）は教師にとっても新鮮である情報を伝えていきたいという気持ちがある一方で、それはある意味で怖い、しかしいつか踏み切りたいとのジレンマがあることを告白している。八重樫は生涯学習時代の到来を歓迎し、次のように発言している。「こんな情報氾濫の時代ですから、むしろわからないということを赤裸々に言える教師こそ、すばらしいと思うんですね。ただし子どもと次元が違うのは、先生はそれをどうすれば究明できるかという、学習の手段を知っているということです。そういったところで新鮮な情報を受け入れるような教育の土壌がなんとかできないものだろうか、最近しきりに思っているんです。（八重樫、1989、19頁）」

学校放送番組に独自性が存在するとすれば、それは放送という搬送経路でもなく、映像というメディア属性でもなく、学習指導要領準拠という規範性でもない。学校教育の現状を批判的に捉え、伝統に盲目的に従おうとする風潮に対峙し、自らの授業を一步離れて吟味しようとする実践者に刺激となる素材の提供を真剣に考えてきた制作者集団の存在こそが、他に類を見ない独自性と言えよう。放送教育の盛衰を学校改革運動という視点から眺めるとき、制作者集団と利用者集団との関係の歴史から学ぶものは少なくない。

参考文献

- 児玉邦二（1990）「放送教育は“運動”か“研究”か 放送教育の温故知新」『放送教育研究』第18号 34-37
児玉邦二・八重樫克羅・浦達也（1989）「学校放送の未来像をさぐる」『放送教育』1989年3月号 14-29
水越敏行（1990）『メディアを活かす先生』 図書文化